

平成20年度畜産生産性向上促進総合対策

家畜の生産性向上に係る
技術普及用パンフレット

肉用牛編



社団法人山形県畜産協会

「肉用牛の生産性向上のための飼養管理のポイント」

繁殖牛

母牛の繁殖管理

早朝や夕方に発情兆候を観察していますか？；発情の見逃しが不受胎の大きな原因です。朝夕時間を決めてしっかり観察しましょう。発情の兆候は「よく動き回る・鳴く・他の牛に乗られる・陰部が充血する・透明な粘液が流れる」などです。

受精適期に人工授精していますか？；朝発情を見つけたら午後、夕方見つけたら翌朝が受精の適期です。はっきりした発情がなくても、出血がみられたら1~2日前に発情があった証拠。発情周期は21日なので、きちんと繁殖記録をつけて次回発情に注意しましょう。

授精後40~60日で妊娠鑑定をしていますか？

その他

遺伝病を予防するため、精液の選択に注意してください。

複数の牛で発情がはっきりしないときは、飼料給与の見直しも必要です。



母牛の分娩管理

分娩予定日が近づいたらよく観察していますか？；牛は受精後平均285日で分娩します。清潔な敷料を敷いた独房に入れ、分娩兆候を見逃さないようにしてください。牛舎から離れていても分娩開始がわかる器械の活用や、夜間に給餌することで分娩を発見しやすい昼間に分娩させる方法も行われています。

正常産かどうかを観察していますか？；正常では破水後2時間ほどで出産しますが、陣痛が弱い、陣痛があってもなかなか娩出しないなどの場合は、母牛の外陰部と自分の手を石鹸や消毒液でよく洗ってから産道

に手を入れて、「頭と両前肢」または「両後肢としっぽ」があるか確認して下さい。この場合は正常産ですが、これ以外の場合は獣医師に連絡してください。

子牛の出生後は、母牛と子牛の様子を観察していますか？；生まれた子牛は乾いた布でよく拭いて、水分をとってください。子牛の臍はヨード剤で消毒しておくとう安心です。子牛が自力で哺乳できるかどうかを観察し、自力で哺乳できない場合は、6時間以内に2Lの初乳を人工哺乳してください。

その他

母親の栄養状態が悪いと、弱い子牛が生まれます。分娩前の痩せすぎや太りすぎに注意しましょう。



出生子牛の管理

下痢対策はしていますか？；感染性下痢対策として母牛へのワクチン接種が有効です。また消化不良による下痢を防ぐには、母牛の餌の種類を変えない(乳成分の安定)、子牛に硬い粗飼料や母牛のエサを食べさせない、などが大切です。子牛は病気の進行が早いので、下痢を発見したら早めに獣医師に連絡してください。

よい環境で飼育していますか？；子牛がいる環境は、清潔で乾燥していることが必要です。

また、冬期間は保温が重要です。各種の保温ヒーターを活用しましょう。

丈夫な第一胃をつくっていますか？；第一胃が丈夫な牛は

発育がよく病気にもなりません。第一胃を十分発達させるためには、スターターときれいな水が必要です。汚れた水などで消化不良を起こすと、発育不良や免疫力の低下などで下痢や肺炎に罹りやすくなります。



育成牛の管理

骨格の成長を促すためには日光浴や運動が必要です。また、十分な粗飼料の給与や適切なミネラルの給与も大切です。

肥育牛

導入素牛、肥育前期の管理

導入時の肺炎対策をしていますか？； 導入牛は、輸送ストレスや環境・飼料の変化などで免疫力が減弱するため、肺炎に罹りやすくなっています。導入後10日間は別飼いで健康状態を観察するとともに、肺炎予防のワクチン接種を実施してください。

導入時～肥育前期に十分な粗飼料を与えていますか？； 導入時すでにビタミンA欠乏の牛がかなりいます。このような場合は、導入後にカロチンの豊富な良質粗飼料の給与が



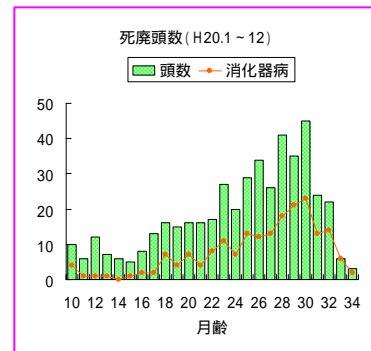
必要です。また、肥育前期の稲ワラ多給は、肉質を向上させるという報告があります。粗飼料が不足すると第一胃の発酵異常(ルーメンアシドーシス)が起こり、慢性下痢、発育遅延、蹄葉炎などを発症したり、ときには鼓脹症で急死したりすることもあります。炭水化物を多く含むパン屑、菓子屑、果物粕、醸造粕などの給与も第一胃の異常発酵を起こしやすいので注意が必要です。

肥育中後期の管理

適切なビタミンAコントロールをしていますか？； 肉にサシが入りやすくするために、生後16～24月齢の間、ベータカロチンやビタミンAを制限する給餌法が一般に行われています。しか

し、ビタミンAを過度に制限すると、食欲不振、下痢、成長の遅れ、盲目などの病気になりやすく、出荷してもズル(筋間水腫)のために肉を廃棄しなければならなくなることもあります。ヘイキューブや前期飼料の給与、ビタミン剤の投与などでビタミンAをうまくコントロールすることが大切です。特に夏場はビタミンAの消費量が多くなるので、**暑熱対策**とともに適切な補給が必要です。

グラフのとおり、18～32か月齢の肥育中後期に死廃事故が多く発生し、消化器病がその4割を占めています。ビタミンAの欠乏が影響している可能性も考えられます。



その他の注意点

- ・市販の配合飼料に多量の糖類（とうこう）を加えると、カルシウムとリンのバランスが崩れて尿石症が発生しやすくなります。
- ・脂肪含量が多い生米ヌカは酸化して消化不良を起こしやすいため、とくに夏場は注意が必要です。
- ・粗飼料中の金属異物、飼料タンク内のカビ、糞尿の過剰施肥による硝酸態窒素の多い自家産粗飼料にも注意してください。
- ・暑い夏の**飲水不足**は熱射病を起こしやすく、重症では死亡することもあります。冬場でも凍結などで水が飲めないことがあるので、特に寒い朝は水の出を確認してください。
- ・牛舎内は清潔に保ち、牛舎の出入りの際は**踏み込み消毒槽**で長靴を消毒します。消毒液は決められた濃度を守り、長靴は糞などの汚れを洗い流してから消毒液に浸けてください。

【作成者】
中央家畜診療所損防課
課長補佐 渡辺 栄次 氏

